

侵襲

岡本俊弥

混雑する通勤時刻帯だった。

電車の到着を待つ列の後ろにいた男が、急に前の通勤客を押し始める動きをはじめた。手を使わず、体を押し込んで人並みを掻き分ける。強引な動きに、数人が何をすすんだ、と罵声を浴びせる。だが、男の顔を見ると、怯んだように場所を空けた。

都会には、関わりにならない方がよい人間がいる。暴力を露わにしたチンピラより、得体の知れなさが危険なのだ。殴られるくらいでは済まないかもしれない。

男には表情がなかった。

無表情とは違う。表情筋が完全に弛緩した、死体めいた顔だった。

異様な雰囲気を感じて人々は退き、男の行く手は自然に開いていった。男は躊躇な

く前に出る。何のためらいもないまま、入線してくる通勤電車の前に飛び込む。飛び込むといっても、ふつうに歩いてホームから落ちたのだ。列車は急制動をかけたが、もちろん間に合わない。人身事故だった。人とダイヤが混み合う都会なので、事故自体はありふれていた。

男は、市内の商社に勤める会社員だった。

一度転職経験はあるが、いまの仕事で勤続十年が過ぎていた。どこにでもいそうな風貌だ。目立った体形ではなく、標準より少し太っていた。外見に頓着しない性格なのだろう。

同僚はふだんの男についてこう語った。

「主任ぐらいになると、成果をうるさく言われるようになってきますからね。ええ、会社での雑談のなかで、疲れるとか、しんどいとかは聞きました。目的が見当たらないとか、もう会社にも自分にしても先が見えたとか、一人で暮らすと気が滅入るとか

ね。まあ文句は多いけど、それぐらいは、愚痴でよく出てくる合いの手みたいなものでしょう。本人はそこそこやれてる、評価もされてると思ってたようですから、ネガティブなのは疲れのせいでしょう。運動もせず、仕事ばかりじゃ疲れるのは当たり前だってね」

男は、ジムに通うようになった。市内が増えてきたIRESTOREニングだった。フロアはあまり広くない。旧来のジムは機材の設置に場所を食う。しかしIRESでは、一人あたりの機器は小さく一種類でよい。賃料が割高な都心でも安く開業ができるから、いまトレンドになっている。内部は倉庫のようだ。照明は最小限、狭い通路を挟んで、びっしりとブースが並べられている。

「インストラクターは少ないし、どこに何があるのか分からない。ちょっと威圧感があって、中は迷路みたいだとか言っていました。でも、すぐ気にならなくなるらしいですね」

ブースはどこを使っても良い。会員用のウェアは毎回貸与される。

まず、ロッカーでバイタルセンサが埋め込まれたスキンスーツに着替える。次にフルフェイスのヘルメットを被って、一メートル四方ほどのブース中央に立つ。

専用のシューズ、両手両足にウェイトが取り付けられる。動き回ってもブースから出ないように、ラバーが張られた飛び出し防止バーを腰のあたりに固定する。

トレーニングはいつでもはじめられる。他人のペースに合わせる必要はない。

「オプションが結構あるみたいでね、まあ、要するにリアルタイムの体感ゲームじゃないですかね。運動量とかは、バイタルサインに合わせてコントロールされてるんでしょう。一人一人、個別にトレーニングを受けている感じになりますよね」

家庭用のVRトレーナーではセンサが不十分だ。I R E S:Interactive Relaxation Exercise System は、世界的な医療機器メーカーによるパーソナライズ可能なトレーニング

グ・プログラムだった。

スタートすると一瞬でジムのフロアは消え去り、毎回見知らぬ風景が現れる。アジアなのかヨーロッパなのか、高原の山中が多い。荒涼としているが、高い澄み渡った空と無人の岩場が見える。

全周が見渡せる。

両足で、むき出しの地面にしっかりと立っていると感じる。

〈まっすぐ走り始めましょう〉

耳元で声がする。

曲がりくねってはいるが、人の通れる道が用意されている。ふつうに走り始める。足にはウェイトがあるはずなのだが、その重さは高低差のある道路の走行感覚にすり替わっている。

男は、これまで運動をしてこなかった。駅までバスに乗り、電車を乗り継いで通勤するだけだ。立っているだけなので歩く距離も知れている。

どう走れば良いのか、要領が分からず苦勞する。

〈慌てず、少しゆっくり〉

耳元の声がささやいてくる。

〈慣れてきたら、ペースを上げていきましょう〉

起伏のある山道を上がり、下り、スピードを上げたり落したりする。はじめた頃は、たちまち息が上がった。

だが、次第に慣れてくる。走れる時間や距離も延びてきた。トレーニングは時間制で料金が決まるが、男は走るのが面白くなって課金をあまり気にしなくなった。架空の山野に過ぎないのかも知れないが、自然の中を走っていると思えるだけで達成感があつた。

フルフェイスといっても、エアの供給のない単なるヘルメットを被っているだけなのに、清冽な山の空気を呼吸しているように錯覚する。

爽やかだ。すばらしい。

女は淡々と話をした。

男の交友関係は限られていたが、女は私的でもっとも近しい立場にあった。ただ、事件が起こる数ヶ月前には、すでにチャットを含め交際は途絶えていた。

「運動はもともとわたしが勧めました。具体的にどうこうはなかったけど。ふだん何にもしないし、お腹も出てきて鬱陶しいから。何度か誘ったのに、わたしと走るの嫌がってました。マイペースなんですよ。誰かに合わせたくない、一人がいいみたい。知り合ったのは一年半くらい前かな。深いところまでいきませんでした。一度同棲を誘われたけど断ったんです。でもまあ、何だか知らないけど、だから関係は続いてました。刹那的だけど、お互い負担がないから。ジムに通つてると聞いたのは半年前です。よく決心したなと、意外でしたね。でも、そのころから疎遠になったのかな。何だか話が食い違ふみたいな、昔の気が合ったときの話題にも付いてこない。冷たくなったとかじゃなくて、無関心になった感じかな。心境の変化なのか、詳しく話すチャンスがなくて分かりません。自然に別れた形ですかね。でも、そう、自殺ですよね。」

びっくりです。信じられない、とまでいうと嘘になるけど。あ、いや、人のすることは分からないなあと思ったから。感情的には醒めてしまっていたので、薄情だけど仕方ないでしょ。兆候ですか、兆候なんかあったかなあ。細かいことで悩むタイプじゃなかったけどなあ。専門家じゃないので分かりません」

脳のMRI画像がある。

男は、事件の前に検診を受けていた。会社の健康保険組合と提携する病院だ。その際に、オプションだった脳検査を行っている。MRI設備のある病院なら、受けられるところが増えてきた。脳梗塞などの予見効果があるが、何を考えて受診したのかは分からない。男の死体は欠損が激しく、脳を含めた体の状態を改めて調べることはできなかった。

「深い溝が見えますが、脳組織が萎縮している状態です」

「ひどい状態ですか」

「ええ、おそらく病院経由で、精密検査要の連絡が届いていたと思います」

「脳の萎縮となると、認知症ですか」

「一般的な意味で言うと、そういう症状も出ていたでしょうね」

「アルツハイマーとかですか」

「確かに若年性のもものありますが、この画像はアルツハイマー型ではないと思われます」

「では、何でしょう」

「脳を萎縮させる病気は、アルツハイマー以外にいろいろあります。レビー小体型などの脳変性疾患、ウイルス性の炎症、多発性脳梗塞などですね」

「どれか分からないのですか」

「精密検査ができないので、何が原因なのか、今となっては分かりませんね。ただ、この画像にはいくつか特徴的な変異があります」

「といいますと」

「例えばアルツハイマーなら脳全体が萎縮する、それ以外でしたら特定の部位、たと

えば前頭側頭部などが萎縮します。この画像では、運動前野や帯状皮質運動野などの高次運動野、一次性感覚野、上頭頂小葉などの頭頂葉部分が顕著に萎縮しているのです」

「どういう部位なのでしょう」

「一次運動野に入っていく入力を作る部分です。具体的にいうと、手足だとか顔の表情とか、そういう部分からの感覚の信号です」

「そこが欠損すると、どうなるのですか」

「体からの信号が正常に受け取れない、となると、コントロールできなくなりますね、ふつうなら」

「動けるのですか」

「いや、とても動けないと思います。直前でも歩いていたと聞いて驚いています」

数週間通ううちに、男は違和感を覚えるようになった。

トレーニング中の爽快感が、外で失せてしまうのはまあ仕方がないと諦めていた。

光景があまりに違いすぎるからだ。

だが、気にもしていなかった都会の猥雑さが、急に不快で汚らわしいものに変貌した。喧しく走りすぎる車や列車、空を遮る電柱、でたらめに引かれた電線、けばけばしい看板や標識、そして煩わしい人の群れ。

対して、透明な空気、風の音しかせず、人の気配の一切失せた踏み分け道。

どこまで行ってもそうだった。時間いっぱい走り続けても、何も無い。

それが、いつ頃からか、ジムの外でも見えるのだ。

都心の人波を抜けるとき、交差点が谷底のガレ場が変わる。折り重なった岩が連なり、間隙を縫って進まねばならない。しかし動き回る人と、不動の岩は同じではない。視界はタイムラプス動画のように駒落としに変化した。男は行方を見失い、たびたび立ち往生した。車道の真ん中で立ち尽くすのだ。幸い都会なので、警笛を立て続けに鳴らされても、他の通行人の関心を引くことはなかった。

無人の荒野にいる時間が増えてくる。

机に向かって仕事をしている合間にも、狭苦しい昼食の食堂で麺類をすすっている

ときでも、視界は不定期に変化した。

I R E S のジムには、いわゆるトレーナは置かれていない。機器の操作説明員としてインストラクターが数人いるだけだ。人間が指導するタイプのジムなら、運動を率先してリードするが、ここではメンテナンスが業務になる。

インストラクターの一人が応じてくれた。

「ずっとトラブルもなく、優良な顧客だと思っていました。そのままなら、憶えてもいなかったんじゃないかと」

「ここは従業員が少ないですね」

「ええ、トレーニングのメニューは機械が決めますから、われわれはトラブルシュートが主な仕事になります」

「トラブルは多いのですか」

「わたしが知る限りでは、めったにありません。モジュール式の機材は交換だけで済

みます。内容も個人に最適化されたメニューと聞いていますし、肉体的な安全マージンがとられています。無理はしませんからね」

「さきほど、そのままなら、とお聞きしましたが、何があったのでしょうか」

「何か月か経ったところに、おかしなことを相談されました」

「おかしなことですか」

「初めて聞く相談でした。人がいると言い出しまして」

「人、というと」

「トレーニングの中に人が出てくる、とね」

「それは異常なのですか」

「詳しいことは分かりませんが、原理的な制約があるようでしてね、トレーニングで出てくる風景には、絶対に人や生き物は出てこないのです」

ジム開設時に行われた、I R E S社広報の説明がある。

Q & Aから一部を抜き書きした。I R E S社は医療ベンチャーであり、ジムのよう

なコンシューマー向け営業施設にはライセンス形式で技術供与がされる。

・ I R E Sとは、どういうシステムなのか。

まず、 I R E Sと汎用的な V Rの違いを説明しておきましょう。

人間なら、いや、生物全般同じかも知れませんが、知覚する情報には、ある種の枠、つまり制限が設けられています。自然現象から生じる入力、たとえば耳で聞いたり目から見えるもの、手や足に触れるもの、甘みや苦みの味などは、その生物が利用する上で必要な範囲しか入力されません。人間には紫外線も見えないし赤外も見えない。あつた方がいいと思う人もいるでしょう。しかし、われわれの生活シーンでは不要なのです。入力される視覚などの信号のダイナミックレンジ、つまり強さや幅も、大きく変動することはありません。入力の種類や強度を律する枠組みがあるのです。人が感知できるものには枠組み、範囲がある。緩衝のためのバッファがあるとしても、何でも受け入れられる余裕などは持っていない。限られた「範囲」であることに注目してください。

大脳中心溝の前方に、一次運動野と呼ばれる部位があります。ここは体の随意運動を司る中心です。人間の運動に関わる指令は、この一次運動野を介して行われます。中でも、視床からの入力には大きな影響力があります。ほとんどの感覚情報が、集約的に入力されています。他の部分からの入力があっても、視床側が優先される。特に目から入ってくる信号は重要で、傷の痛み、痛覚を上書きできるほど優先度が高い。VRとの違いを端的に申し上げるなら、旧来のVRは「雑」なのです。こういった仕組みを無意識に使いながらも、入力が脳内部の感覚野に無用の干渉を及ぼし、平衡感覚を乱す事故などが頻繁に見られました。要するに、定量的な基準に欠けていたわけです。

・IRESでは、視覚入力 of 帯域を全面的にハックする。

先ほど申し上げたように、帯域つまり入力の範囲は限られています。帯域をすべて置換すれば、体感情報を完全に上書きすることが可能になる。ただし、万能ではありません。どんなに本物らしくても、画像中に人物などのキャラクタが出現するとオーバードロードの邪魔になる。擬人化、擬生物化された存在は、大脳の前頭野を刺激する

ため、脳情報に混乱を生じるのです。残念ながらコンシューマーゲームには向いていないので、利用分野は医療用、トレーニング用など専門分野に特化しております。

人が見えるようになった。

走る道は毎日違っている。陽が差し込まないほど深い谷の底を走ったり、踏み外すと滑落しそうな狭い峰を走ることもある。天候は、いつでも快晴だ。視界は開けていて、遮るものがなければ遠くまで見晴らせる。

ある日、山の上に人影が見えた。気になって、もう一度振り返ると消えている。

何日かに一度が続き、やがて毎日現れるようになった。

登山をする格好ではない。

スーツを着て、ネクタイを締めた姿で男を見下ろしている。まだずっと遠くだったが、場違いな服装なのでよく目立った。

いったい誰なのか、声をかけるべきなのか。

男は一瞬迷う。しかし、走ることが目的なのだと思います。余計なことはい

ほうがいいだろう。

男は走り続け、人影はすぐに見えなくなった。

だが、数日後に人影はふたたび現れた。前回よりも少し近くだった。

服装は変わらなかった。冴えない色の着崩れたスーツ、撚れたネクタイ。

なぜ、こんなものが侵入してくるのか。男は怒りを覚えた。これだけ清浄で穢れない空間に、汚れたものが混じり込むなんて。

人影は不定期に、男の視界の端の方に、見え隠れするようになった。

また近くなっている。

カウンセラーの担当者は、会社から委託を受けた業者だった。社員向けカウンセリングや、メンタルヘルスを専門としている。予約をすれば受診できる社員向けのサービスである。担当者は医師ではないが、心理士の資格を持っている。男との会話を憶えていた。

「あまり、深刻ではない様子でした」

「どんな感じだったのでしょうか」

「ふつう、メンタルに不安を感じる人は雰囲気落ち着かない。無口とか饒舌とか関係なく、文字通り安定していません。それに比べると、とても冷静な感じがしました」

「何を相談したのでしょう」

「仕事に気が散る、集中して仕事ができないと言っていました」

「具体的には」

「ゴールが見える、と」

ジムのランニングにゴールはない。スケジュールされた時間を走れば、どこで切り上げてよい。もちろん体調次第なので、途中で終わることもできる。自分から止めなくても、センサ信号にリスクが検知されると自然に終わるシステムだ。だから、競技スポーツのようなゴールはない。ゴールポストも、ゴールテープも、待ち受ける観

衆も。

「ゴール？」

「陸上競技などのゴールのことだと思います。仕事の完了とかの、抽象的な意味のゴールとは違う」

「どういう意味でしょう。ゴールが見えるとは」

「毎日走っている、近づいてきた、どこにいてもゴールが見える。そんな風なことでした。その件に関しては執拗に説明してくれました。比喩ではなさそうなので、文字通り見えていたのでしょうか」

「具体的に見えると」

「終わりを示すゲートがある、アーチ状で何かきらきら光る羽のようなもので飾られている、ゴールと言葉で書かれていないが、ゴールとしか思えない、とか」

「コンサルティングで聴く内容ではないですね」

「そう思いますが、何しろ冷静な口調で話すのです」

「どう答えられましたか」

「こういうケースでは、相手の状況によるのですが、とりあえず休むことを勧めたり、産業医との相談の機会を設けたりします。治療が必要と思われるからです。ただ今回は、異常さを感じましたので、心療内科の受診をアドバイスしました。幻視と態度のギャップが大きすぎて、わたしが判断できる範囲を超えていると思ったからです」

「反応は」

「冷静でした。受診の予約方法について聞かれました。社内には知らせるなどという希望でした」

「誰にも、ですか」

「ええ、コンサルティングで聞いた内容は純粋な個人情報です。本人の同意がない限り、会社にも伝えられないルールです。自殺や傷害の恐れはなさそうでしたからね、ええ、あのときは」

人間はさまざまな免疫機能を持っている。

白血球の中にある顆粒球、マクロファージ、棒状細胞、リンパ球などだ。大半は主に外部から侵入するウイルスや細菌に作用するが、リンパ球の一つT細胞だけは「内部」を監視している。自分の細胞が自分ではない悪性新生物、つまりがんに変貌する瞬間を見張っているのだ。細胞分裂のエラー、がん化は珍しくない。加齢によってしだいに増加するが、通常はT細胞によって抑制されている。しかし、T細胞はどんなときでも正常に働くわけではない。がん細胞を自己の細胞と誤認識し増殖を許すこともある。この誤認識を緩和するメカニズムは、高価ながん治療薬にも応用されている。

他の臓器から隔離された脳には白血球はいない。だが同じようなメカニズムが用意されている。ここではグリアセルの一部ミクログリアが、T細胞と同様の働きをする。これは鍵と鍵穴の関係に似ている。鍵と鍵穴があつていれば正常、合わなくなつたとき、異常とみなすのだ。外からの侵入者ではなく、内部の造反者を見張る機能が、体だけでなく脳にも備わっている。

ゴールが見えるようになった。

どこまでも、いつでも走り続けることができはずだった。実際、これまで男が目にするのは未踏の大地で、踏み分け道でさえ偶然できたものと思えた。

あれは何だ。

最初、それは峰のはるか先にあった。陽の光を受けて、きらきらと輝いていた。反射光が見えるだけなので、何かは分からない。

しかし、数日たつと、アーチ状の人工物なのだと分かるようになってきた。

何を意味するのか。

人影は相変わらず現れた。当初よりもずっと近く、ただ目のまえではなく走りすぎた後ろに出現するのだ。気配を感じて振り返ると、岩陰に背広が見えることがあった。目だないように隠れているのか、目的があるのか、皆目分からない。

その一方、ゴールも近づいてきた。

モノトーンの光景の中で、場違いな煌びやかさを見せて、ゴールは存在感を増していく。あそこにたどり着くのか。もうすぐなのか。

男は道を外すようになった。方向を変え、逆走することもあった。できる限り、ゴ

ールから離れるのだ。

ゴールを通ってしまうと何もかも終わるのだ。男は根拠なく、そんな予感に苛まれた。逃げなければならぬ。

だが、ゴールは常に男の前に現れた。

「つまり、何が起こったのですか」

「脳の神経細胞が、ミクログリアによって喰われたのです。ミクログリアは中枢神経中のマクロファージといえるものですからね」

「がん化していたのですか」

「ある意味では」

「ある意味、というと」

「本来あり得ない入力経路が生成され、ミクログリアはそれをもともと自分の細胞ではないもの、侵入者、異物とみなした」

「しかし入力信号が異物になりますか」

「いや、信号ではなくて、信号に対応する神経細胞に変異が現れたのです」

「どういうことでしょう」

「IRESのシステムでは、視覚の全帯域を占有する形で、機械が生成した仮想空間が入力されます。その結果として、本来あった五感信号は行き場を失う。これが蓄積されることで、本来信号を受容するはずの神経細胞に異変が生じる。異変はミクログリアによってがん化したものとみなされ、攻撃を受けた神経細胞は失われた。これが、深い溝が作られた原因と考えられるのです」

「だとしても、あまりに短期間過ぎませんか」

「実際のがん化が起こるわけではありませんからね。ミクログリアが神経細胞を誤認するのです」

「あるいは、不要のものとみなしたのかもしれませんがね」

「不要、そう、人工的な信号で体内にあったもともとの機能が置換できるのなら、必要ないといえるかもしれない。確かにね」

ゴールのゲートは目の前だった。

どの方向に走っても、ゲートが立ちふさがることにはもう分かっていた。

ここを抜けると、何があるのだろうか。

もしかすると、また別の行程が現れるのかもしれない。しかし、男にはこの世界から立ち去る気はなかった。今のままでいい。どこにも行きたくはない。何とかして、ゴールを回避するのだ。破壊できる手段があるのなら、ためらわずそうしていただろう。

すると、ゲートのアーチの向こうに人影が見えた。

あいつだ。

どこにでもいそうな風貌だ。目立った体形ではなく、標準より少し太っていた。同じネクタイ、同じスーツ、くたびれた鞆を手にしている。今回は隠れもせず、道の真ん中に進み出てきた。

「何をためらっている」

大きな声がした。

「ここまでいい」

「いやだ。なぜおまえの言うとおりにしなければならぬ。おれの好きなようにやる」
「好きなようにか。何がしたい」

声は大きかったが、機械音声のように平板だった。しかも、弛緩した顔には一切の表情がない。

「今まで通りでいい。何も変えるな。ゴールなんかいらぬ、お前も消え去れ、目ざわりだ」

だが、返事は男の要望を無視するものだった。

「もう、ここで終わりだ」

男は黙ったまま、後ずさりする。後ろを向くと走ろうとする。開けていた道は、いつのまにか岩が林立する谷間に変わっている、隙間を縫うように男は逃げた。狭い小道をすり抜けようとすると、押し返す抵抗があった。

やがて、視界が開けた。

そこには、奈落があった。奈落の底には、男が走ってきた道が続いている。

「まだ、終わりじゃない」
男はつぶやくと一歩踏み出す。